七友会

第　2　号

岩手大学人文社会科学部同窓会

目　次

あいさつにかえて……猿川弘治……1
偶感　一、二……馬場孝一……2
窓（会員のたより）……3
北と南と　畠平泰彦
ボクノキンキョウホウコク　ワカバヤシナオキ
特別寄稿……菊池亮介……5
評議員会報告、卒業記念植樹について他……7
昭和56年度同窓会会計決算書……8
昭和57年度同窓会会計予算書、事業計画他……9
新理事紹介……11
通信欄・理事会から……11
編集後記……12
同窓会役員名簿……69
会　則……68
会員名簿（昭和55年度卒業）……65
（昭和56年度卒業）……45
特別会員名簿……19

題字　岩手大学人文社会科学部長　大畑荘一

あいさつにかえて

七友会会計
猿川弘治

4月という、あわただしくも新鮮な一つの節目がまた一つ流れてゆき、我々一期生ははや社会人2年生となり、後輩諸君も社会人として人生の悲哀と学生々活への郷愁をしみじみと感じていることと思います。

さて今回、3月に引き続きまして、七友会だより第2号がようやく発行に至りました。幹事諸氏もなかなか多忙な方が多く、幹事会開催あるいは相互の連絡にも多くの困難が伴います。日々仕事に追われるサラリーマンにとって日曜日は大変貴重であります。そんな中で、ともすればなまけてしまいそうな我々の足を幹事会へ向けさせるものは、学生時代の一つ一つの絆のおかげでありましょう。会のたびに、やれ○○君がどうした、××さんが結婚するそうだ、などとさまざまな情報交換が行われ、その度に、今どうしているだろうか、会いたいものだ、という気持ちにさせられます。こういう部分こそが、まさに、我々をたより発行へとかり立てるものであり、全会員に同じ思いを分けてあげよう、それが自分の義務である、と思わしめるものであります。

さて、このような会の運営には、当然ながら金が必要でありますが、会費の納入状況が現在のところ、今一つかんばしくないようであります。活動の源なくしては我々も動くことができません。このことだけは、全会員のすみやかな御協力をいただきたいと存じます。

いずれにしても良い人生、これからどのような山河を越えるのか想像もつきませんが、一つ言えるのは、自分の食い扶持をかせぎ出すのは、そう容易ではない、ということでしょう。そんな中で最近私などが痛感せざるをえないのは、からだだけが資本だ、ということであります。仕事によってはだいぶからだに無理をしいられる方もおありかと思いますが、体をこわしては元も子もありません。どうぞからだだけは、常にご慈愛下さいますよう会員諸氏にお願い申し上げます。

偶感、一、二

人文社会科学部教授
馬場孝一

私たちの人文社会科学部は若い学部であり、その名称も天下唯一？であるためか世間的知名度は高くない。そこで、私は外部を訪ねるときには、「学部案内」の二および三頁に記載されている岩手大学の沿革と人文社会科学部の特色と題されている学部構成の説明文のコピーを手渡すことにしている。さらに、盛岡は寒いでしょう、というような質問をする人に対しては、私製の盛岡・東京気象比較表を差し上げることにしている。これは、東京天文台編「理科年表」（年刊、丸善発行）から作成したものである。それには、年間月平均気温（盛岡九・七度、東京一五・〇度）、日最高・日最低気温、月別平均不快日数、暖房デグリーデー（暖房期間中、室温を一四度に保たせるために基準温度一〇度として毎日の平均気温との差を積算したもの）など、一四項目に関する数値が対比されている。これはなかなか好評であって、今年の年賀状にもその一部を掲載したところ、印象深いとの評価を得た。諸兄姉もこのような比較表を各自の出身地や就職先の土地について作成され、配られたらよいと思う。啄木や賢治の言葉を引いて学びの地の雰囲気を伝えるのもよいが、ときにはこういった硬脈的表現もパンチ力があると思う。

岩手県の生んだ硬派型偉人、田中館愛橘や新渡戸稲造などももっと頻繁に引き合いに出されてもよいと思うが、意外に登場は少ない。田中館はすぐれた物理学者であるとともに日本語のローマ字書き推奨論者であった。交通手段の未発達の時代に六八回も国際会議に列した経験者としては、日本に対する国際理解の推進にはまず日本語のローマ字書きが必要との結論に達したのもふしぎではない。新渡戸はもともと農学者であるが、国際連合の前身である国際連盟の事務局次長を勤め、英文著書「武士道」等の著者としても国際的に高名であった。新渡戸は発行予定の新紙幣の肖像人物として脚光をあびようとしているが、老若男女に周く知られているわけではない。二人とも日本の代表的国際文化人であった。

啄木や賢治も庶民の心と生活をみすえながらも広い世界に憧憬（しょうけい）を抱いた節がある。このような具眼達見の先人を生んだ岩手の地に育ち、あるいは学んだ諸兄姉は必ずやいつかその精神を各自の道で顕わすであろうことを祈る。

☆窓☆

北と南と

畠平泰彦

私が生まれた富山は雪国でした。私が学んだ岩手は氷の国の印象がありました。そして、今暮らしている岡山は、まさに陽の当たる場所の感じがしております。

地域性や風土性というものは、私たち地理学を学ぶ者にとって究極のテーマの一つであります。その意味で、最近この北と南であまりにも異なる風土に改めて驚ろいております。四季の移ろいも、岩手のリズムと岡山のリズムではやはり違っております。岩手にチャイコフスキーが似合うなら、岡山はモーツアルトの雰囲気があります。さらに生活様式や言葉の響きも全く岩手で味わった感覚とは異なっております。それ故、時として岩手で過ごした日々がなつかしくなることがあります。この感覚の相異は、例えば東北新幹線が開通しても、私は変わらないものと考えております。社会が一様に便利になったとしても地域的特性から長年培われてきた文化の香りは、簡単には失われない、また失ってはならないと考えております。岩手に限らず次代を担う私たちは、地域の文化を地域的差異とともに守ってゆかねばならないのではないでしょうか。

しかし、風土の差異にノスタルジックな感慨を味わってばかりはいられません。私たちを取りまく状況は、ますますきびしく、かつ変化しております。その中では、岩手に暮らそうが、岡山で生活していようが、共通の土俵の上にいるのだと思います。そしてそこにある国民的課題に対して私たちは、常に問題意識を持って過ごしてゆきたいものです。私にとって、岩手での四年間は過去のこととなっても、私の問題意識の中に岩手で学んだ多くのことが今も生きております。そんな岩手で背負った課題を感じる時、実は地域差によるなつかしみ以上に、岩手の地を恋しく思うのであります。

来年は、大学に昭和四十年代生まれの学生さんが入学してきます。時代の流れを感じつつ、私もなお一層の精進を心掛けてゆきたいと思っております。同窓会員の皆様の御健康と御活躍を心よりお祈りしております。

（岡山大学大学院生）

ボクノキンキョウホウコク

ワカバヤシ　ナオキ

毎朝、「朝のホットライン」、「ズームイン朝」に盛岡が写らないかと、朝食の合間、期待してTVを観ている。ちなみに朝食は、トースト一枚、サラダ、フルーツ、ミルクで済ましている。

自宅から会社まで国鉄を利用。片道二十六分の間、読書に時間を費やす。けっこう本が読める。北広島のサラリーマンはみんな本を片手に通勤している。学生よりも社会人の方が本を読んでると実感してしまう。

オフィスは時計台のソバ、毎朝記念撮影をしている新婚さんに会う。朝から熱熱!!のハネムーンカップルを見ると、仕事する気がなくなってしまう。

マスコミに入って、実戦的なことをしているのではなく、今は電算部でIBMの機械相手に仕事をしている。今のセクションには長くて三年、短くて一年。そのうち音楽関係のセクションに行きたいと思っている。十一月まで、販売と調査を担当することになっている。大学時代は、宿敵A新聞の世論調査で稼がせてもらったが、今度は自分の仕事になってしまった。プログラミングやオペレーションが主な仕事、最初、なんでコンピューターをいじるのかと悩んだが、けっこう文科系的な要素があることがわかる。プログラミングの発想はアート・だなあと思ったりする。

自宅から通っているので、食べることの心配がないのでいい。いいもの食っているので、ちょっと肥えてしまう。ニューウェイブを聴く者にとって恥ずべき事だ。

ススキノにも週二回ほど足を延している。学生の時のように次の日昼まで寝てられないので、メチャクチャ飲めない。ウーン、上田のくらむぼんや秀吉が懐かしい。

体のために、いつも九階の電算部までは階段を利用し、休日は近くをサイクリングしている。やっぱり、体が資本です。

まあ、以上がボクの近況です。

（北海道新聞社勤務）

▼特別寄稿▲

開学のころを回想して

菊池　亮介

夏の訪れとともに、人文社会科学部開学のころの思い出が蘇ってきます。

この学部が昭和五十二年に創設され、その第一回の記念すべき、栄ある入学式が挙行されたのが、北国の盛岡も、ようやく夏を迎えようとする、六月四日のことでした。

その翌日は日曜日でしたから、翌々日の六月六日からは、早速授業が始められるといった、いかにも学内外からの待望久しかった、新学部開講にふさわしい、密度の高い日程だったことは、第一期生の知っての通りです。

この開講最初の授業が、たまたま私の講義でした。私はこの巡り合せを、あたかも「こけら落とし」の一番目の役を演じさせてもらうような、晴れがましさと責任を感じ、精進潔斎の気構えで、この講義に臨んだものでした。このことは、私にとって生涯忘れられない、記念すべき思い出の一つとなっています。

この年次は開講が遅れた分を、夏休みに入ってからも講義が続けられました。

なにぶん夏の暑い真っ盛りのことでしたから、私も合い間をみてはプールへ行ったもんでした。するとそこでは、うだる講義室からやっと解放されてきた学生達に会うことがありました。そのときのかれらは、いささか意外なことに出つくわしたような面持ちで「おやっ、先生も泳ぐんですか」などといわれて、年寄りの冷や水をてれながら、へたな泳ぎを一緒にしたことなども思い出されます。

人文社会科学部の学生の人達とは、自分の所属学部学生という意識による親近感とともに、このような触れ合いなども、お互いの親密感を一層深めることにもなったのでしょうか、今でもひとりひとりの顔が、いろんな場面とともに脳裡に懐しく浮んできます。

あの頃の私達は、宿年の願望であった学部創設が実現し、それまでの長い間の苦労が報いられた喜びと、創学の生新な理念に燃え、是が非でもこの学部をもり立てて、軌道に乗せていこうという、誠心を傾けての努力に一所懸命でした。

また学生のみんなも、新学部という新天地の開拓者として、独自の新しい学風を創り、伝統の基盤を築こうとする心意気がうかがわれました。

人文社会科学部も開学以来はや五年余を経て、すでに卒業生を二回も送り出しました。

社会人となった卒業生の皆さんはいま、きびしい社会の荒波にもまれ、ときには理想と現実の相克に悩みながら、いろいろとご苦労をしていることでしょう。

しかし、その皆さんのひとりひとりが、実社会においては、岩手大学人文社会科学部の代表者として、またこのあとに続く後輩の先達としての、大きな役割をになっていることを忘れないで、頑張ってほしいものです。

それには、この「七友会」という同窓の絆を大切にし、もっともっと太いものに育てていくことが、同窓生の使命であり、その成長を心から期待しております。

（昭和五十七年七月盛夏）

追記

私こと

この春定年退官に際しまして、七友会から誠に結構な記念のお品を頂載いたしました。

ご厚志をありがたく感謝いたしますとともに、皆様方のご健勝と一層のご活躍をお祈りし、略儀ながら、この紙上をお借りしまして、心から御礼申し上げます。

評議員会報告

昭和六十七年度の定例評議員会は、会則の第四章、第十四条に基づき、さる五月十五日人社一号館会議室にて開かれました。連絡先不明等で通知できなかった評議員もありましたが、十名の出席を得て、左記のように、昭和五十六年度決算報告および、五十七年度事業計画・予算案を全会一致で決定いたしました。今年度からの新しい事業として、学部への学術・文化講演等開催の援助を行うことになりました。また、今年度は卒業生と新入生の二学年分の歳入予算のため、積立金を多くとり、以後の運営に際しての留保金としました。

（昭和五十六年度同窓会事業について）

確とした事業計画を会員諸氏に連絡できないままに、理事を中心とした役員会を通じて、昭和五十六年度には次のような主要事業を実施いたしました。

一、会員名簿発行（昭和五十六年八月）

二、七友会だより（会報）創刊（昭和五十七年三月）

三、卒業記念植樹（昭和五十七年三月）

卒業記念植樹について

昭和五十五年度卒業の一期生から、卒業記念として何かを大学に残すことを検討した結果、植樹をすることに理事会で決定しました。樹木はヤマボウシといって、初夏に白い花をつけるミズキ科の落葉樹です。場所は、人文社会科学部三号館の前に植えることになり、昭和五十七年三月十三日にささやかながら植樹式を挙行いたしました。当日は天候にも恵まれ、役員をはじめ、大畑学部長先生や各専攻科代表の先生方なども御列席下されて、無事ヤマボウシ十二本が人社部構内に根をおろしました。

今後、会員の皆様が御健勝であるように、植樹したヤマボウシが十二本残らずスクスクと生長することを祈ります。もし、何かの折に盛岡においでの際は、大学構内のヤマボウシを御覧下さい。

昭和56年度人文社会科学部同窓会会計決算書

〔歳　入〕　（単位　円）

科　目	歳入決算書	摘　要
1　会　費	896,000	入会金 2,000円× 144名 終身会費 8,000円× 76名
2　雑収入	7,673	預金利息
合　計	903,673	

〔歳　　出〕　　（単位　円）

科　　目	歳入決算額	摘　　要
1　事　　業　　費	401,900	
会員名簿印刷	90,000	300円× 300部
会員名簿郵送料	34,320	240円× 143部
会　則　印　刷	8,000	16円× 500部
会　報　印　刷	51,000	68円× 750部
会　報　郵　送　料	9,000	60円× 150部
卒業生への記念品	36,000	180円× 200本
卒業記念植樹	163,000	ヤマボウシ12本、工事費等含
諸　　費	10,580	退官教官への記念品等
2　会　　議　　費	58,350	役員会会議費等
3　事　　務　　費	50,161	封筒、印鑑等
4　特　別　積　立　金	200,000	定期預金
5　雑　　費	50,000	事務、会費徴収謝礼金
小　　計	760,411	
6　来年度繰越金	143,262	
合　　計	903,673	

昭和57年人文社会科学部同窓会会計予算書

1　一般会計

〔歳　　入〕　　（単位　円）

科　　目	歳入予算額	摘　　要
1　会　　費	3,680,000	10,000円× 368名
2　雑　　収　　入	7,673	預金利息
3　前年度繰越金	143,262	
合　　計	3,830,935	

〔歳　　出〕　　（単位　円）

科　　目	歳出予算額	摘　　要
1　事　　業　　費	830,000	
会報発行関係	330,000	
連　絡　費	30,000	住所確認用連絡費等
会報印刷費	210,000	
会報郵送料	90,000	
会員活動援助費	200,000	
卒業生への記念品	120,000	600円× 200名
卒業記念品	80,000	
支部援助費	70,000	支部設立及び活動援助
講演会補助	200,000	広く文化的事業への援助
諸会議費	30,000	退官記念品、慶弔費
2　会　　議　　費	130,000	
評議員会会議費	50,000	旅費等
諸会議費	80,000	役員会、会議費等
3　事　　務　　費	50,000	
4　特　別　積　立　金	1,500,000	
5　雑　　費	50,000	事務、会費徴収謝礼金
6　学部設立10周年記念用積立金	200,000	
7　同窓会設立5周年記念用積立金	200,000	
8　予　　備　　費	870,935	
合　　計	3,830,935	

2　特別会計

〔歳　　入〕　　（単位　円）

科　　目	歳入予算額	摘　　要
1　積　　立　　金	200,000	
2　雑　　収　　入	10,000	預金利息
3　一般会計からの繰入金	1,500,000	
合　　計	1,710,000	

〔歳　　出〕　　（単位　円）

科　　目	歳入予算額	摘　　要
1　積　　立　　金	200,000	
2　新規積立金	1,510,000	
合　　計	1,710,000	

昭和五十七年度　事業計画案

1　会報の発行（年2回）

第一回…七月中旬発行予定ー会員名簿付　四五〇部
第二回…二月中旬発行予定　八五〇部
（卒業生、新入生分も含む）

2　会員活動援助

(1)　卒業生への記念品（証書入れ、その他）
……卒業生全員へ

(2)　卒業記念品援助……大学へ

3　支部活動及び支部設立援助

4　文化事業援助

学部専門分野に関連した講演会などの文化的行事の開催を援助するために、毎年、予算の許す範囲で支出する。

学部への寄附の形をとり、運用に関しては学部に一任するが詳しい支出報告をうける。

5　特別積立

(1)　学部創立十周年記念事業積立

(2)　同窓会設立五周年記念事業製立

学術講演会について

今年度より行うことになりました、文化事業援助については、学部より次のような開催予定の連絡を受けました。時間のある会員の方は、ぜひ御参加下さい。

学術講演会演題	講師職氏名	実施日	学科目等
ドイツとアメリカの大学	ジーゲン大学教授 ヘルムート・クロイツァー	10月5日	欧米研究
プルーストにおける現代性と伝統	ソルボンヌ大学教授 ミシェル・レーモン	11月8日	〃
心理学の過去と未来（仮題）	東北大学名誉教授 北村晴朗	未定	行動科学研究
科学と社会	東京大学講師 中山茂	10月7日	科学論

新理事紹介

評議員会において、次の四名の方に新たに理事をお願いすることになりました。任期は二年間です。よろしくお願いいたします。

藤沢保浩　アジア研究、五十六年度卒業。
現在、人文社会科学部聴講生。

押切守夫　欧米研究、五十六年度卒業。
現在、岩手県立盛岡農業高等学校勤務。

佐藤美津子　行動科学研究、五十六年度卒業。
現在、岩手保養院勤務。

中野幹子　法学研究、五十六年度卒業。
現在は、市職員として市立図書館勤務。

通信欄

◇　◇

龍泉洞の町、岩泉にこの四月より来ています。岩泉中学校二年B組担任、美術専科。社会科のはずが、どこでどうなったのか。もともとが、美術は好きでしたので、結構楽しんでやっています。美術の授業はこうでなくては！というものを少しずつ、生徒とつくりはじめたこの頃です。

（青澤　弘明）

◇　◇

同窓会をやる日は極力参加したいので、三連休の中日にしていただけたら幸いです。

現在、東京リコー販売に派遣され、営業をやっております。たまに同期で集って東京でさわいでいます。

（片原　紳一郎）

◇　◇

現在、明星大学通信部に所属し、小学校の教員免許状の取得にもがんばっています。

（佐藤　ちづ子）

◇　◇

普通高校で一、二、三年生の英語、同文法他を担当し、多忙な毎日で、何しろ持時間が校内一だから大変のようです。又、スポーツクラブではテニスの顧問を担当している。

（畑沢　睦子　代筆）

◇　◇

落合さん、お元気ですか？
横手にも、アソビに来てねー

（横山　礼子）

◇　◇

東京の自宅へ戻って早三ケ月、盛岡の事がなつかしく思われています。そして大学生活も。

（浅井　一弘）

（勝手ながら、送られてきた葉書から抜粋させていただきました。）

◇　◇

御結婚おめでとうございます。御多幸を祈ります。

米丸　隆一様

遠藤　隆　様（五十七年六月）

楠美　幸子様（新姓　熊原（五十七年五月）

理事会から

七友会も、新しい会員をむかえることができ、今後一層、活動に励まねばならないこと、理事をはじめ役員一同襟を正して、この会報第二号発行に取組みました。しかしながら、円滑な同窓会運営のため、会員の皆様の御理解、御協力を仰ぐしだいです。諸事情はあることと思われますが、会費未納の方々がまだ数多くおられますので、お早めに同窓会までに御支払い下さいますようお願いいたします。

（郵便振替の場合）

口座番号　盛岡五四二三

岩手大学人文社会科学部同窓会

なお、今回通信欄にも載せましたが、会員間相互の連絡を密にできれば幸いですので、御結婚、その他諸般の事柄は、是非同窓会までに御連絡下されることを願います。

編集後記

月日の経つのは早いもので、三月に七友会だよりを出したかと思ったら、もう第二号を出す時期になってしまいました。会員諸氏も忙がしい日々を送っていることと思いますが、とりわけ盛岡在住の役員は、仕事に同窓会にと、それは忙がしい日々を送っています。当初、七月中旬発行を予定していましたが、集まって話を進める時間も少なく、なんといっても仕事を持つ身はつらく、このように遅れてしまいました。原稿を急いでいただいた方々には、ほんとうに申し訳けございません。やっとできた第二号にも、連絡がとれずはっきりしない会員があることは残念ですが、なつかしい仲間との交流のために役立てば幸いです。

佐